

## 姫路革の呼称を大事に

学術博士・元(社)日本タンナーズ協会専務理事 出口 公 長

### 曖昧化する呼称

以前にも述べたことだが、姫路革は古くは越鞆（こしたん、こしなめし）、越革、古志鞆、播州鞆、播磨革、姫路鞆、姫路鞣など様々な名称・表記で呼ばれてきている。しかし、現在ではこの姫路革の名称が、山本和人「姫路革と革細工」『日本の民芸』第523号（1999）によれば「何時とはなしに白鞣と共に」タンニン鞣革なども含めて「これらを総称して『姫路革』という様になったのである。」という事態にまで至っている。私の記憶によっても、姫路市の発行するものの中には、首をかしげるような記述のあったことをいくつか覚えている。これは、そのときどきの市の担当者の取材不足や勉強不足の結果と言わざるを得ない。

江戸末期に至るまでは、初めに述べたように独自の呼称、または地名を冠した呼び名で姫路革を表していた。問題は、本来の「姫路革」にクロム革もタンニン革も含めて姫路革という人が何時ごろから出てきたのか、ということである。明治時代に入ってからいわゆる新式製革法としての植物タンニン鞣し法及びクロム鞣し法の技術が導入され、それが広く普及して今日に至り、製革産業の根幹をなしている。

### 見過ごせない呼称の揺らぎ

従って、姫路革の呼称の揺らぎを考える場合、新旧製法の絡みと、業界以外の人た

ちがどのように見てきたのかを考えることによって、その流れが見えてくるように思うのである。

恐らく、そんな呼称ぐらいでそれほど大騒ぎするほどのことはなかろうと思われるかもしれないが、歴史的な重さと姫路革の技術伝承の難しい現実を考えると、近代製革法にそれが埋没していきつつある現実が看過できないのである。いささか冗長になるかもしれないが、本誌を借りて事情を整理させていただきたい。

まず、新式製革法が導入され始めた明治時代に焦点をおいて皮革に関する呼称、特に姫路革・タンニン鞣し革・クロム鞣し革を中心に拾ってみよう（別表参照）。

### 独自に使われてきた姫路革

明治以降の呼称の例について手元資料から抽出してみて改めて感じられることは、姫路革という言葉は、新式製法とされた当時のタンニン革やクロム革とは厳然と区別されて扱われていたということである。地場で製造されることに誇りを持って市川晒という表現すら見られる。すなわち、播磨とか姫路とかいうような広域的な表記ではなくて、市川という晒場の限定的な呼び名すら使っていたのである（大垣家文書ほか）。

姫路革として総称されるのは、塩と菜種油で揉み上げる白鞣し革を意味することは

## 「姫路革」等の皮革の呼称例

注：クロームは現代表記のクロムに統一した

年	皮 革 の 呼 称	出 典 等
明治15年	市川晒 他例も	大垣家文書
明治18年	姫路革 (植物タンニン鞣革、クロム鞣革)	大蔵省『貿易備考』(1885)
明治38年	Japanese white leather	Paessler, J.『Collegium』(1905)
明治42年	姫路白鞣革 「姫路独特の生産品たる鞣革姫路革」	神戸又新日報 明治42.3.6 (1909)
明治42年	姫路革 (露西亜革)	『皮革世界』第3年第1号 (1909)
明治42年	姫路革 露西亜式単寧鞣革 クロム鞣革	播磨鷺城新聞 明治42.10.17 姫路製革所の広告
明治43年	Japanese leather, Himeji leather, White leather	姫路製革所の海外向け 英文案内書 (1910)
明治44年	姫路革、白鞣革 (ロシヤ式鞣革)	『姫路誌一斑』 姫路市役所 (1911)
明治44年頃	姫路革 (単寧革)	姫路製革所現況調査報告書 (株)山陽蔵
明治45年	姫路鞣、越鞣	三木藤次『花田村誌』 花田尋常小学校 (1912)
明治45年	姫路白鞣革、越革、姫路革 市川晒革	里正義ら「姫路白鞣革について」 『札幌農林学会報』第16号 (1913)
大正元年	姫路革 (単寧鞣革、クロム鞣革)	松本静吾『姫路紀要』(1912)
大正2年	姫路革、白鞣革 (クロム革)	橋本政次『姫路名所案内』(1913)
大正5年	Japanese white leather 古志鞣、白鞣、鞣、姫路白鞣革、白鞣革	Ray, M.「Japanese White Leather」 『JALCA』第11巻 (1916)
大正14年	姫路革、古志鞣、白鞣、鞣、旧式製法 (新式製法、単寧鞣革、クロム鞣革)	澤山 智「皮革」『明治工業史』 日本工業会 (1925)
昭和8年	白鞣革、姫路革	星 忠生「皮革雑考」『歴史公論』 第2巻第11号 (1933)
昭和28年	古志鞣、姫路白鞣革 (クロムなめし、薄物なめし一般)	山崎功「太鼓はおどる一兵庫県高木の皮なめし」 『部落』第48号 (1953)
昭和29年	姫路革、姫路鞣、越鞣、越革	岩田黙然『花田史誌』 花田史誌編纂会 (1954)
昭和37年	姫路革、姫路白鞣	今井啓一「姫路鞣について」 『日本上古史研究』第62号 (1962)
昭和41年	鞣、白鞣 (西洋式なめし法、クロム鞣革、タンニン鞣革)	服部裕「革(かわ)」『山陽ニュース』 第9号、山陽電鉄(株)(1966)

いうまでもないことだが、地元においては今でも「なめし」と言えばこの白鞣し革を指し、現在生産の主流となっている西洋式製革法の革は、単に「クロム」とか「クロム鞣し」、あるいは「タンニン」とか「タンニン鞣し」と称しており、決してこれらも含めて「姫路革」とは言わないのである。というのは、クロム鞣し法やタンニン鞣し法は世界中で広く用いられている技術であって、基本的には世界のどこでも製造が可能な皮革なのである。一方、白鞣し法とは姫路独特の製法であり、世界的に見ても稀有な存在であることから、地名を冠して「姫路革」と言われてきていることを銘記しておきたいのである。



高木神社：ここに合祀されている聖神社（写真中央の社）は技術を伝授したという聖翁を祭神とする。（昭和47年撮）

### 昭和40年頃には10社以下に

今回の執筆にあたって昭和期に入ってからのもも詳しく調査したいと考えたが、時間的に対応できず、今後の宿題にしておきたい。戦後については皮革年鑑等を調べてみた。総合通信社『全国皮革産業名鑑』昭和23年版には姫路地区の製革業者名が随分と出ているが、その中には白鞣し革業者名は出ていなかった。その大きな理由は、ある程度の規模の企業は、戦時中は軍事物資を製造する仕組みに組み込まれていて、

すべての資材がそこに集中していたこと、そして、敗戦直後のことで全国的に皮革原料や資材がなくて白鞣し業者はまだまだ生産活動に入れなかったからであろう。商工通信社『皮革年鑑』昭和37年版には1社のみ、「白鞣し革」企業として「増田製革所」（姫路市）が掲載されている。それ以外はほとんどがクロム革及びタンニン革の製造業者である。私の取材した記憶では、昭和40年前後には白鞣し業者は10軒以下にまで減少していたのである。

### 業界内外の状況の激変

この名称の問題で今後さらに懸念されることの一つは、姫路白鞣し革をまったく知らない皮革産地の後継者が増えてきていることである。昭和20年以降いち早くクロムなめしに転向した世代や時期から言うると現在で丸60年も経過しているのである。ということは、昭和20年に生まれた人が60歳である。すなわち、この60歳の人はもちろんのこと、その息子やその子（孫）に至っては白鞣し革という言葉すら聞いたことが無い、あるいは知っていても実感が持てないという世代にもなっていることである。

市の商業や経済の部局の担当者の不勉強ぶりだけを責めるわけにはいかない。白鞣し革を取り巻く環境がすっかり変わってしまっていることである。産業史の研究に関わっている人の中にも、同じように良く弁えずに記述している例が出てきている。嘆かわしいといわざるを得ない。

### 最近の事例から

姫路市が毎月出している「広報ひめじ」の今年2月号に掲載された「市川・小川橋周辺」の紹介記事の中で「市川を東に渡った花田地区は白なめし革に代表される皮革産業が現在も盛んで、姫路革として広く知

られており、これも市川の水を生かした特産品です。」書かれている。

若い女性記者の文章なのでそれほど目くじらを立てなくてもいいのではないかなと言われそうだが、しかし、筆者にとっては矢張り内容が気になるのである。「白なめし革に代表される」とあるが、これはあくまで歴史的・技術史的な意味での象徴的な存在としての白鞣し革であって、現在の産業の主役は圧倒的にクロム鞣し革である。すなわち、クロム革が主体の「皮革産業が現在も盛んで、姫路革として広く知られて」いるというのである。特に問題にしたいのはこの「現在も盛んで、姫路革として…」の部分である。この姫路革には伝統的な技法の「姫路革」という意識はまったく感じられないだけでなく、姫路で産出する皮革がすべて姫路革という感覚なのである。この感覚が先に紹介した、山本が言及した状況そのものといえる。

生産の95%以上を占めるクロム革やタンニン革は世界中で製造され、もっとも普及している皮革であって、特に地名をつけて呼ぶような習慣は無いのである。一方、現在でも伝統的な姫路革を守ろうとして努力



燈籠：高木神社の鳥居と燈籠には「大坂問屋中」とあり、明治2年とか播磨、榎仙等の名前が見える。(昭和47撮)

している熱心な人たちがいる。こうした状況をもっとしっかり取材して記事にして欲しいと願うとともに、もっと言葉を大切に扱っていきべきだと考えたいのである。

### 新しい呼称に親しみも

また昨今、「ひめかわ」とか「姫革」と呼ばれたりしているが、これは商業的な発想からの地名に絡めた呼び名であって、いわば、愛称のようなもので、優しさ、温かさといった雰囲気には好感が持たれている。しかし、歴史的にみると、私は適切な表現ではないと考えている。姫路革、姫路白鞣し革を称してこそ、歴史の重みや伝統を伝えることが出来ると思っている。

姫革というような表現がいつごろから使われ始めたのかについては私はよく知らない。兵庫県立歴史博物館が平成2年に日蘭修好380周年記念「きんからかわの世界」展を開催したとき、同時に企画展「ひめかわの伝統美一意匠と技法」も開かれた。ここで用いられた「ひめかわ」という表現について館員に質したものだ。その以前から姫革の言葉のあったことは承知をしていたが、公的に用いるのはいかがなものかという疑問を感じたからである。答えは前述のような趣旨だったと思う。つまり、この時点では社会的にはすでに定着し認知されていたと考えられよう。

### 「姫革」は昭和40年代後半からか

昭和30年代に入ってから我が国の皮革産業は、原皮の輸入が自由化されたのを契機として毎年製革量が増え、拡大する民需に呼応するのに多忙を極めるようになった。それに引き換え姫路革の需要は減少の道を辿るばかりであった。そこで姫路革不振の打開策を探るべく当時の県立皮革工業指導所の服部裕所長の呼びかけで昭和42年11月

より大野泰彦姫路工大教授、今井謙吉北中皮革技師長、杉田正見同所研究員及び私らが参画して数回の白鞣しに関する技術検討会が持たれた。県の機関が動くということは、姫路市の商工業部局でもその振興策が検討もされたのではないかと推測されよう。革細工に関わる人たちの意見も聞きながら、このような用語が案出されたのではなからうか。

なお、この技術検討会では一度業界人との会合を開いているが、企業者としての出席は上杉・石田・益田・山森・金沢・鳥尾の6氏であった。こうして始まった白鞣し技術の改良・革新（化学技術の導入）が奏功して姫路革に準ずる新しい風合いの皮革が生まれ、経営的にも成功している企業者もおられるのである。

### 伝承技術と呼称の難問

それとは別に実は、本来の白鞣し革の製造技術を守ろうとする人たちが提唱する姫路革呼称保護の問題がこの数年、起きている。その要点は、伝承技術で製造した革こそ姫路革であり、その革を使って製作した製品こそ姫路革細工であるといい、そのような素材を使わない製品や伝承技術によらない革には姫路革という呼称を使うべきではないというのである。さらにいえば、かつては広く姫路革と称するものの中には前述のような技術開発によって化学的な手法で作られたものがあり、「それらが姫路革と称したのでは消費者をだましたことになる、従って別の呼称や表記を使え」というのである。このような要望が反映され、現実一般の展示品・商品が「姫革」とか他の表示文字で説明されているのだが、果たしてこれでいいのだろうかと感じてしまう昨今である。ますます「姫路革」が埋没していくように思えてならないのである。

### 流通してこそ技術保存が

白鞣し革が産業として存在してこそ伝承技術の本当の保存も可能になってくると考えているが、伝承技術を守りたいとする運動には「産業」の部分が不足しているように思われてならない。「産業」即ち「商品」の部分を軽く見たのでは、本当の保存運動につながっていかないのではなからうか。つまり、作られた白鞣し革が二次製品業者に販売されて実際の革細工になり、商品として販売されていくという現実が伴わないと、高い水準の伝承技術の保存にはつながらないのである。いくら記録をしっかりと残しても、伝えるべき生きた技術は伝わらない。一枚一枚異なる原料皮に即応的に対処して均質なものを作り上げる職人の技術、これは記録には出来ないのである。体で覚え、伝えるものなのだ。職人の技術とは、日常的にもものづくりが行われていてこそ、的確に維持されるものだろう。ところが現実には、もはや白鞣し革は流通の形態を保てなくなってきていて、生きた技術を維持していける環境ではなくなっているのである。真に残念である。

先般、久しぶりに近作の白鞣し革を拝見した。しかし、古法によって製作されたというものの私のイメージとはかけ離れたものだった。皮の厚さ、油揉み、晒の程度、革のこなれなどが私の知る白鞣し革とどうも違うのである。本来、職人の技量と体力の成果が製品に現れると思うのだが、どうもそれが感じられないのである。

いずれにしても、最終製品が大衆の生活の中に存在してこそ姫路革であるという原点が時の流れの中で失われてきているのであろうか。